南日本新聞を読んで

毎朝記事にツッコミ

人材育成コンサルタント
矢野　圭夏

「え？私が紙面モニター？」このお話を頂いた時は、嬉しさと戸惑いとが同時に沸き起こった。心の声は、こうだ。

「愛読していないのに？」

これも神様が与えてくれた試練と思い、今こうして言葉を綴っている。

毎朝欠かさず配達員の方が届けてくれる贈り物を、まずはぐるりと一読。その中で、「お、これは」と目に留まる記事を選び、「私ならこう考える」「いやいや、論点はそこじゃないでしょ」とひとりツッコミ。これが意外と楽しい時間なのだ。

例えば、14日付の「学ぶ！未来の遊園地」の記事では、取り上げられていた方のトークイベントに私は実際足を運んでいたので、記者が取材して読者に伝えたいと感じ紙面で表現されていることと、現場で私が受け取ったメッセージとの相違に「へぇー、そこが記事になるんだ」という驚きや疑念があった。単なる切り口の違いとも言えるが、事実と解釈について考えさせられた。

「報道」には社会を変える力がある。メッセージを発信することで、人の心を動かし、行動を後押しし、社会を動かす。発信者や発信媒体としての価値観や前提がフィルターとなり、行く先を示すのだ。

私は学生時代、テレビ局や新聞社、出版社といったマスコミへの就職を目指していた。「報道」には社会を変える力があると信じていたからだ。自分一人では何もできない。でも変えたい現実がある。目指す世界がある。そのために、もっと広く、もっと遠く、もっと多くの人に伝わる言葉を身につけたい。「どうすれば伝わるのか」模索してきた15年だ。

南日本新聞と言えば、「かお」も楽しみな記事のひとつ。これまでたくさんの方が登場されてきたが、私もそのひとり。

「地元の新聞に載る」ことを鹿児島の人はどう捉えているのだろう。

大阪、東京と暮らしてきて鹿児島で生きる私としては、「新聞に載る」なんて、よほどの功績をあげない限り縁のない世界だと思っていた。それが、私でも載る。（と言っては、記者にもこれまで登場された方にも申し訳ないが）。「伝える」機会を頂けたことに深く感謝。

「かお」に限らず、新聞をめくるとそこには友人の活躍の様子や、鹿児島で生きる人々のきらりと光る姿を目にできる。県民の活躍は地元の人々のみならず、例えば遠く離れて暮らす家族への便りにもなる。大阪で暮らす両親に掲載記事を送ったらとても喜んでくれた。

社会情勢を伝える媒体はたくさんある。クリックひとつで欲しい情報が手元に届く時代。その中で新聞が果たす役割を、作り手も読み手も心に留めながら、鹿児島の過去・現在・未来を伝え続けてほしいと願う。

やの・けいか氏　1979年大阪市生まれ。2008年結婚を機に鹿児島へ。13年人材サービス業で独立し、リーダー・起業家育成に従事。鹿児島ウーマンライフ研究会代表。本領発揮に火をつける着火ウーマン。

南日本新聞を読んで

読み手の視点を知る

人材育成コンサルタント
矢野　圭夏

実は、紙面モニターをお引き受けする際に「読者対象はどんな方ですか?」と尋ねたところ、担当者の答えは「老若男女、多くの方」だった。

価値観や生き方、働き方が多様化し個別化している今、「あまねく多くの人に」届けることは、価値観が絞られ均一化されていた時代と比べると困難になっている。私自身、個人事業を営む身として「誰の、どのようなニーズに、私の価値を提供できるか」を常に考えざるを得ないし、商売をしている人なら誰でも少なからず実感があるだろう。

では新聞の役割って…?

ふと幼少の頃を思い出す。わが家では大阪で馴染(なじ)みのある〇〇新聞を購読していたのだが、毎朝6時頃に父が玄関に行き、手に取った新聞をトイレに持ち込むのが慣例だった(余談だが、幼心にみんなで使うものをトイレに持ち込むという行動に抵抗感を抱いていた)。

それはさておき、わが家では食卓を囲むたびに、新聞記事やテレビのニュースを題材にあれやこれやと議論するのがコミュニケーションの基盤となっていた。高尚な議論をするというよりは、半ば「いちゃもん」のようだったり、時事ネタにかこつけて好き勝手に自分の話を持ち出したりすることもあるが、この日々のトレーニングとも言える経験が今に生きている。

そう思うと数年ごぶさたしていた新聞が実はとても身近な存在だったと気づく。子どもから大人まで、年齢性別を問わず楽しめる。

ん? 確かそんな場所があったよな・・・「あ、デパート!」

鹿児島には「山形屋」という老舗デパートがあるが、地下食品から7階レストランまで老若男女が行き交う場所だ。品ぞろえの好みや世代はあるかもしれないが、家族でいつ行ってもそれぞれのニーズに合うよう設計されている。

新聞はまさにそういう役割。「おはよう」で家族の一日がはじまり、「新聞」を中心に昨日はどうだった、今日はどうだ、とコミュニケーションが生まれる。父と娘では見る記事も異なるだろうが、それが異文化交流になってちょうど良い。一つの記事に対して喧々囂々(けんけんごうごう)と主張を交わし合うのも良い。

そうやって人は、知識や情報を得て、視野を広げ、視点を磨き、言葉を交わし、コミュニケーションの土壌を培ってきたのではないか。

南日本新聞は、子どもから高齢者まで、ローカルネタからグローバルネタまで、桜島の風向から離島のお祭りまで、誰が読んでも何かが見つかる仕掛けがある。こんなに品ぞろえがよく地域で最も選ばれている「情報のデパート」を活用しない手はない!

一つリクエストするとすれば紙媒体の弱点「双方向性」への対応だ。どの記事が人気で話題になったかという反応や共感が分かる仕組みがあれば、作り手にとっても読み手の視点が分かり報道の意欲を引き出される。これぞ紙面コミュニケーションの醍醐(だいご)味ではないか。

南日本新聞を読んで

ネット時代の課題興味深く

人材育成コンサルタント
矢野　圭夏

紙面モニターも今日で3回目。1回目は「伝えることと新聞」、2回目は「家庭内コミュニケーションと新聞」をテーマに私の昔話を交えて書いた。

この1カ月では「ネットと新聞～取材現場から」がとても興味深かった。今の時代だからこそ生じる課題や配慮すべき事柄が毎回テーマに取り上げられている。

情報端末の発達により情報源が多様化し、いつでもどこでも欲しい情報を得ることができ、個人の発信も容易になった。それに伴い、個人情報にまつわる犯罪やトラブル発生の危険性も高まったように思う。

情報が自由化された恩恵を受けて、私もSNSで仕事やプライベートについて語り、自身のWEBサイトでもブログを綴っているのだが…。

私を含め多くの人が日々、ソーシャルメディアとリアルの両方において大量のコミュニケーションを交わしていて、その一言一句に一喜一憂しているかもしれない。

私は組織のリーダーや講師を育てる仕事をしているが、こんな悩みによく立ち会う。

「気持ちをうまく伝えられないんです」

対人関係やコミュニケーションに課題を感じている人は多い。それもそのはず、学校教育で「コミュニケーション学」を習った記憶はない。誰もが自分の体験を通じてしか学べないのだ。

では、「うまく伝えられない」時に何がおこっているのだろう？　そもそも「うまく」とはどういう状態か？　「伝える」とはどういう行為なのか？

私は幼少の頃から「伝える」ことに強いこだわりを抱いていたということは第1回でご紹介したが、コミュニケーションが苦手だと自覚したことはない。

もちろん、伝わらずにもどかしい思いをしたり、誤解や言葉のあやで人間関係がこじれたりしたことも数知れず。

しかしそんなことは恐れず対話のトレーニングを重ね、頭を殴られるような「伝わらない」体験と、魂が震えるような「伝わる」体験を繰り返し今に至る。この過程ではきっとたくさんの方にご迷惑もおかけしてきたはず…。

学びから得たことでもあり大切にしているのは「小さな成功体験」。仕事もプライベートも、対個人のコミュニケーションでも同じ。失敗も成功もやってみないと分からない。「どうしようかな」と脳内でぐるぐる考えを回らせるのも必要な時間だが、リアルの場へ「どや！」と飛び込んでみて得られる成果は大きい。

これは個人のみならず企業やコミュニティーにおいても当てはまる。仲間のチャレンジを応援する心、失敗も成功も認め受け入れる寛容さ。小さな成功体験を積み重ねて組織の財産にできるかどうかはリーダーの器次第だ。

世に溢れる情報の泉から何を選び何を得てどう生かすのか。リーダーとして何を示しどこへ向かうのか。

…なんて偉そうに書いてはみたが、実は私が一番に肝に銘じなくてはいけないテーマかも。

南日本新聞を読んで

まちのドラマ発掘の仕組みを

人材育成コンサルタント
矢野　圭夏

この1カ月を振り返り、何に言及すればいいのだろう…。そんな気分に陥った最後の執筆。国民文化祭で活気づくニュースが飛び交ったかと思えば、悲惨な事件が1面で報じられる日もある。私が日々の出来事に泣いて笑って悩んで浮かれている間にも、世界はぐるぐると回っているのだ。

鹿児島市に住むひとりの30代女性として近頃の関心事のひとつは「まちづくり」。わが国の施策でいえば「地方創生」だろうか。鹿児島の特産品を全国へという記事をかなりの頻度で目にしたし、実際に地域の商品開発の場に立ち会う経験もできた。学生が企業や専門家と組んで商品開発を行う事例も増えているようで、社会に出る前に社会との接点をもつことは大きな財産になるに違いない。

私がまちづくりに関わるきっかけになったのが「たにやま未来会議」。鹿児島市の谷山地区に住む人や関心がある人が力を合わせ、地元の活性化のためにアイデアを持ち寄り自分たちのマチづくりを推進するコミュニティー・イベントである。今年9月から毎月1回の会議を重ねている。

私は第3回のワークショップの企画とファシリテーション（司会進行）を承った。求められたのはただの会議進行ではなく、会場の空気を温め、参加者の気持ちをひとつにし、力を引き出し、成果を高めること。なかなか骨太な場だった。

経営者やリーダーからの相談で多いのが、「当事者意識」が欠如していること。周囲の出来事や目の前の課題を自分に引き寄せて、何ができるか考えて行動を起こす力。今回の依頼者からもそんな事情を聞いていた。

「当事者意識」はどうやって醸成されるのか？　確かなのは、『当事者意識を持てよ！』と言われて持てるものではないということ（笑）。ではどうやって「その気」にさせるのか？

私は「そもそも」を大切にしている。価値観も背景も異なる人と人が顔を合わせ物事に取り組む過程で、感情や意見がぶつかり合うのは当然。そんな時に「そもそも」に立ち戻ることで、物事の原点を見直すことができ整理されてくる。自分の思いやモチベーションの源泉に気づき力が湧いてくると、当事者意識も芽生えて行動に結び付く。

「たにやま未来会議」では、第4回でファシリテーションを担当する女性2人に指導をさせていただいたが、人の成長を間近で感じられた。『司会よろしく、って任されたけど、初めてで不安だらけです』とつぶやく彼女たちが「楽しい！」と笑顔で人前に立てるようになるまでのドラマはここでは書ききれないが、まんまと「その気」にさせられた彼女たちの今後、そして谷山地区の未来がとても楽しみだ。

まちには小さなドラマが溢（あふ）れている。新聞という報道媒体が大小すべてのドラマに光を当てることは難しいが、地域の取り組みに光を当てるために読者と新聞とをつなぐ「ネタのパトロール隊」のような仕組みやコミュニティーがあったらいいなぁ。…ネーミングは別として。